

梅棹忠夫の残した『人類の未来』

小長谷有紀

(こながや・ゆき) 国立民族学博物館教授

未完の著『人類の未来』は、河出書房新社の「世界の歴史」シリーズ全二十五巻の最終巻をかざるものとして構想されていた。編集者として伴走した小池信雄さんは、当時の事情をもっともよく知る人物のひとりであろう。現在の編集者たちのもとにに応じて、これまでですでにいくつかご自身で回想をのべている。

たとえば、国立民族学博物館で開催されたウメサオタダオ展での図録に相当する『梅棹忠夫——知的先覚者の軌跡』では、「暗黒のかなたの光明」を求め苦闘した時代」と題して、初期の企画のときからのようすを披露している。また、おなじころに刊行された河出書房新社の文藝別冊『梅棹忠夫——地球時代の知の巨人』には「幻のベストセラー『人類の未来』」と題して、目次を完成させたころのようすをつたえている。さらにまた、季刊誌『考える人』の梅棹忠夫特集号では「たった一人だけの読者」と題して、『人類の未来』にとどまらず、梅棹忠夫のさまざまな肉声をつたえている。これだけ書かれていてもなお、いまだつきない経緯がありそうで、わたしは小池さんにインタビューをもうしでた。

本稿は、そのインタビューにもとづいて当時の状況を解説し、梅棹忠夫の残した『人類の未来』の解題に代えるものである。こころよくインタビューに応じてくださった小池さんにふかく感謝する。

本が「家具」だった時代に

小池さんが人物往来社から河出書房にひきぬかれたのは、昭和四十一年、一九六六年四月のことだった。

当時、中央公論が全集「日本の歴史」をヒットさせ、一巻を担当執筆すれば家が建つというほどの羽振りのよさがうわさされていた。河出書房もまた、「世界文学全集」をヒットさせ、初版二十万部、三十万部という数字で売りまくっていたという。全集ブームの時代が到来していた。

自宅の壁に、家具のようにして全集をそろえた時代なのだった。戦後生まれの団塊の世代が就職し、家庭もち、住宅をもつにはまだやや早いようにおもわれるが、家をつくるというブームと、全集をかいそろえるというブームはセットだった。全集が壁にならんでいるだけで、なんだかとてもかしこくなったような気がするにちがいない。本、とりわけ全集がいわば家具の一種としてよくうれた時代だった。

当時、河出書房の社長は世代交代したばかりで、わかくて意欲的であり、中公が日本史をするなら、河出は世界史をやるうじやないか、文学の河出から歴史の河出をつくろう、という意気込みで、小池さんがひきぬかれたのだった。

ところが、配属先は教養部門というところで、たったひとりきりで、まったくシーンとせずかだったため、二日めあたりで辞職しようとおもった、という。ドイツ語の歴史全集がつみあげられて、それを参考に構成をかんがえよという業務命令は、昭和史を専門とし、雑誌社ではたらいってきた小池さんには苦痛だった。やめずにすんだのは、人物往来社ときの先輩である脇坂勇さんもひきぬかれて河出書房にやってきたおかげである。

毎日、入社するとすぐにふたりで喫茶店にぬけだしては、構成について議論した。脇坂さんいわく、「洋書を

勉強するなんて、そんなばかなことはやめろ、学参かってこい」。学参とは受験参考書のことである。受験参考書はベストセラーでもあり、ながい時間に耐えている、いわば名作である。その参考書の構成を採用すれば十分だ。よけいなことをかんがえる必要はないというわけである。

毎月刊行して二年で完結、ということであれば、二十四巻の構成となる。学習参考書の構成も偶然に二十四章であったから、これでよし。あとは書き手の問題だ。書き手については、東京大学や京都大学の教授、教授だけでは足りないから助教も、それだけでも足りないから、さらにそれらの大学出身で他大学につとめている教授たち、というように範囲をひろげてリストをつくつたらしい。その結果、もつともらしい構成にはなつたけれども、いかにもおもしろみに欠けた。

そこで、そもそもこの出版企画を社長に売り込んできたフリーの編集者片山修三氏に企画の意図を問うたところ、世界史ではなくて「人類の歴史」でいきたい、その冒頭は「人類の誕生」になる、というアイデアだったらしい。「人類の誕生」ということであれば、今西錦司という人がアフリカでサルを研究しているようじゃないかという漠然とした感じで、二十四巻シリーズの冒頭に今西の『人類の誕生』がかかげられた。ただし、今西錦司著の『人間以前の社会』をよんだ小池さんは、少々文章がかたすぎるなあと不安を感じて、弟子筋の梅棹忠夫をくわえ、二人のなまえをならべておいた。

この企画案をみた桑原武夫はおおいにおどろいた。「河出の編集部は今西錦司と梅棹忠夫をよく見ぬいたね」と感激したらしい。「人類の誕生」を念頭において、霊長類を研究していることは、京都大学内では周知の事実であつても、一般にはまだあまり知られていなかったたので、河出はよくぞ見ぬいた、というわけである。ところが、この連名作戦は失敗におわる。

梅棹忠夫の企画力

善はいそげというわけで、河出書房は今西と梅棹をさつそく京都の著名な料亭に招待した。一流の先生は一流の料亭で口説くというわけである。河出書房からは江口幸専務が同席して、企画の趣旨を説明した。ところが、梅棹が「はあ、そうか」などとあいづちをうちながらおもしろそうに聞いているのに対して、今西はもくもくと酒をのみ、終始、ブスツとしていた。桑原武夫に「気配がどうもあやしい」と報告すると、「ああ、そうやろな」と、どうやらふたり連名という案がうまくいかないことを先刻承知していたようだった。

桑原武夫のつきなる指示は、梅棹君はちよつとやめて、今西先生ひとりということ、こんどは今西の家に行けとのことだった。そろそろ停年が近づいている今西にとつて、多額の印税は魅力的であり、執筆をひきけるだろう、という桑原氏の予想どおり、ひきうけてもらうことができた。問題は、梅棹に対してどのようにこたわるか、である。しかも、桑原からは、シリーズ全体の企画メンバーから「梅棹君をのがしちゃだめだ」という。ブレインとして残しつつ、共著案からはおりてもらうということなので、非常にむずかしい注文だった。

しかし、脇坂・小池の両氏が梅棹の自宅を訪問すると、意外にも、「世界の歴史」の企画そのものについておおいにもりあがった。梅棹は、従来の西洋史と東洋史というようなくぐみではだめだ、広大なユーラシア大陸として中洋が重要なのに、日本人はほとんどしらない、と力説した。その結果、河出の世界史シリーズは、イスラムや東南アジアなどにも焦点があてられ、これまでにない内容となったのである。

梅棹は一九五〇年代にこれらの地域をみずから踏査し、その文明的意義を体得していたからこそ、それまでの固定的なくぐみをこえた案を具体的に提示することができたのだろう。ついにシリーズ最終巻を書かずに